



16 しあわせハンス

(グリムの昔ばなし)

7年間忠実に働いた善良なハンスは、給料として大きな金のかたまりをもらいました。

故郷へ帰る途中、ハンスは馬に乗った騎士に会いました。

騎士が馬に乗った旅のすばらしさを語ると、ハンスは重くて困っていた金のかたまりと馬を交換してしまいました。

ハンスは旅の途中で牛、ブタ、ガチョウと持ち物を次々に、より小さな物と交換していきました。

そのたびにハンスは、得をしたなあ満足しました。最後にハンスは、はさみとぎの男に会いました。

はさみとぎの仕事は大もうけができるぞ、と聞かされたハンスは、自分のガチョウと、はさみとぎがはさみを研ぐ大きな石を交換しました。

「僕は何て幸運な男だろう」とハンスは喜びましたが、今度はその石が重くてたまりません。

水を飲みたくなくてハンスが井戸のそばにかがむとその石は井戸の中に落ちてしまいました。

「もう石の重さに苦しまなくていいんだ」とハンスは大喜び。小躍りしながらお母さんの待つ家に帰りました。

しあわせは、ハンスの中にありました。

ローム君の新・博物日記

世界昔ばなしを科学する

このシリーズは、半導体技術で世界に貢献するロームがお届けしています。おなじみの世界の昔ばなしの中から毎回テーマを一つとりあげ、そこに隠れているいろいろな不思議を科学の視点で見つめます。さて、今回のおはなしは…

●富と自由としあわせと。

この「しあわせハンス」、北欧とイギリスにも似た話があることは知られていますが、とても珍しい昔ばなしです。日本の「わらしべ長者」のように、次々と良い物を手に入れる話が一般的ですが、こちらは逆。単なる滑稽話に過ぎないのでしょうか。いいえ、この昔ばなしにもちゃんとテーマがあります。生活から紡がれてきた昔ばなしには「ひとのしあわせとは何か」を考えさせるところがあります。例えば、グリムの昔ばなし「漁師とその妻」は、限らない欲望が最後には破滅をまねく話。一方「しあわせハンス」は、すべてをなくしてしあわせ。価値ある物を手に入れるのが富とされますが、それがかえって重荷になることもあります。捨てることで自由という幸福を得ることもある。そんな人生の一面を、この昔ばなしは語っているのかも知れませんね。

●私たちの良心、お金。

「しあわせハンス」が成立した時代は、おそらく物々交換と貨幣制度が混在していた頃。お金の起源は、古代メソポタミア文明・エジプト文明の頃から確認されています。お金は、物々交換の不都合を補うために生まれました。それは、価値を「交換する」「ためておく」「はかる」ため。大きな物を交換するのは手間がかかりますし、食べ物などは時間がたてば腐ります。そして、いろんな物が現れると、価値を比べる目安がいらいます。こうして、必然的に生まれたお金。今日の私たちにとっては、

当たり前の物です。しかし、お金は人類が進歩してきた大切な要素である「信頼」する気持ちから成り立っています。信頼されなくなったら、お金は紙くず同然です。普段見慣れない外国のお金が、オモチャのように見えてしまうのもそのためでしょう。人の話をすぐに信じたハンスは愚かに見えます。でも、その信じる心が、経済を支えてきたのも事実なのです。

●あなたの満足は、あなたの中に。

得をしたと思うとすぐに満足して、ハッピーになれたハンス。満足感とは何でしょう。脳内の情報を伝える、300種以上の神経伝達物質。その中の一つ、セロトニンは、満足感を左右する物質と考えられています。(これだけですべて決まるわけではありません。)セロトニンが少ないと「満足だ」という気分が味わえず、気がめいったり、過食症になったりするそうです。ある調査によると、粗野な大人は、セロトニンの量が極端に少なかったとか。このセロトニンを利用した抗うつ剤なども開発されています。ただし、神経伝達物質の受容体にはそれぞれ個人差があるので、セロトニンは多過ぎても少な過ぎてもだめ。幸福かどうかを決めるのは、結局自分自身だとよく言われますが、科学的に見てもそうなのかも知れません。しあわせなハンスの中に適量で満たされていた小さな物質は、誰とも取りかえっできない財宝だったようですね。

昔ばなし監修/白百合女子大学教授 小澤俊夫